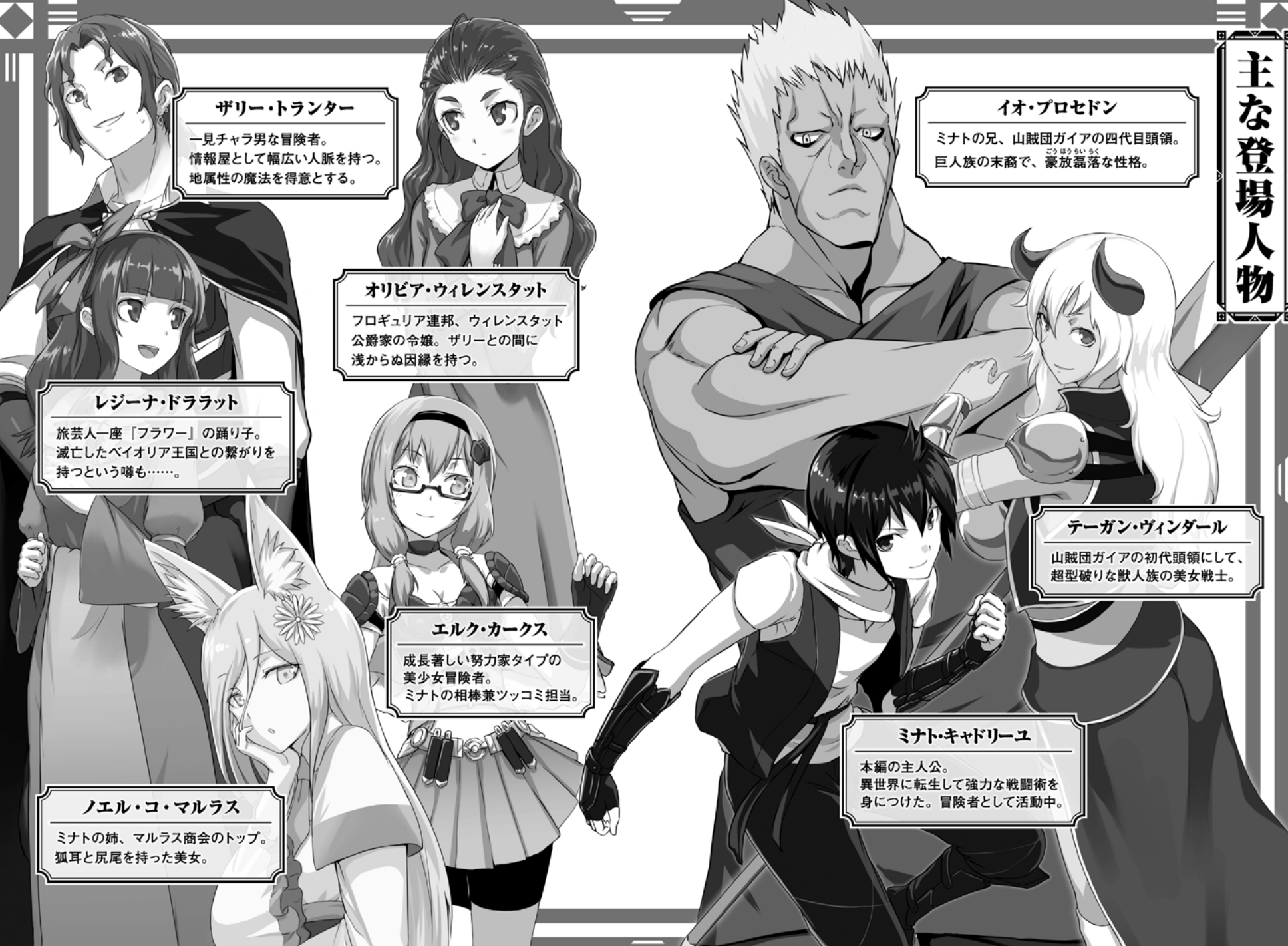
MAKEN NO DAYDREAMER

魔拳のデイドリーマー 14

NISHI OSYOU
西和尚

ILLUSTRATION : Tea

主な登場人物



ザリー・トランター

一見チャラ男な冒険者。
情報屋として幅広い人脈を持つ。
地属性の魔法を得意とする。

オリビア・ウィレンスタット

フロギュリア連邦、ウィレンスタット公爵家の令嬢。ザリーとの間に浅からぬ因縁を持つ。

レジーナ・ドララット

旅芸人一座『フラワー』の踊り子。
滅亡したベイオリア王国との繋がりを持つという噂も……。

エルク・カークス

成長著しい努力家タイプの美少女冒険者。
ミナトの相棒兼ツッコミ担当。

ノエル・コ・マルラス

ミナトの姉、マルラス商会のトップ。
狐耳と尻尾を持った美女。

イオ・プロセドン

ミナトの兄、山賊団ガイアの四代目頭領。
巨人族の末裔で、豪放磊落（ごうほうらいらく）な性格。

テーガン・ヴィンダール

山賊団ガイアの初代頭領にして、超型破りな獣人族の美女戦士。

ミナト・キャドリーユ

本編の主人公。
異世界に転生して強力な戦闘術を身につけた。冒険者として活動中。

第一話　巨人

不慮の事故で命を落とし、何の因果か異世界に転生した僕こと ミナト・キャドリーユは、朝の清々しい空気の中、船の甲板にいた。

船とは、僕ら冒険者チーム『邪香猫』の旗艦であり拠点でもある『オルトヘイム号』。

僕は手すりに体を寄りかからせて、風に当たりながら、リラックスしていた。

隣には、チームの副リーダーであり、メンバーの中では最も付き合いの長いエルクがいて。

反対側の隣には、最近入ったばかりのメンバーにして僕の研究助手であるネリドラがいる。

三人で見ているのは、船首の向こうに見える何もない荒野。せいぜい、大きめの岩があちこちに転がっている程度で本当に何もない。緑もなければ生き物もいない。

女の子二人が一緒なんだから、もうちょっと眺めのいい景色でも見るなり、あるいは時間帯をずらしてロマンチックな夜景でも眺めるなりしたいところではあるが……まあ、今回は目的が目的ってことで。こういう場所の方が都合がいいんだよね。

ロマンチックな感じはまた今度、と心の中で思いつつ、僕は手に持っていた、いかにも押しちゃいけなそうな感じのスイッチを押した。ポチッとな。

直後――轟音。爆発。
巻き起こる土埃、噴き上がる火柱。すぐに爆風が僕らの所まで届く。
それらが収まり、土煙やら何やらが晴れた後には……クレーターが出来ていた。
大小様々な岩を消し飛ばし、地面を盛大に抉って出来たそれを見て僕は……一言。
「んー、上手くいかないもんだ」
「実験結果、失敗。重複位相指定精度の見直し必要。その他諸々の理由により火力不足――と」
「……不、足……？」
寝起きの気だるさを撃退する目覚まし代わりに行った、今日一発目の火力実験。
自らの未熟さに苦言を呈した僕と、それを淡々と記録するネリドラ。僕ら二人に対し、理解出来ないものを見るようにジト目を向けるエルク。
こんな感じで、今日も一日が始まる。

☆☆☆

ネスティア王国第一王女様の依頼で、第二王女様を救うために大監獄『ラグナドラス』に潜っていたあの任務から、しばらくが経った。
新たな仲間として、ラグナドラスで出会った女囚人のネリドラとクロエ、そしてネリドラの別人格であるリュドネラを迎えた僕らは、特に大きなトラブルもなく、普通に毎日を過ごしていた。
まあ、日常的にAランクとかそこらの魔物と戦っている状況が『普通』かと言われれば、そこは意見が分かれるかもしれないけど、僕にしてみれば軽い運動程度のものなので。
そんな軽めの運動と同時に、助手であるネリドラや、時々だけど師匠も加わり、研究にも没頭している。
先ほどの火力実験も、もちろんその一環だ。今回のはちょっと失敗だったけど。
本当ならば、爆風はともかく、チリ一つ残さず範囲内が消滅するはずだったんだが……思ったよりも残骸が多い。さっきも思ったけど、上手いこといかないもんだ。精進あるのみだな。
僕がこうして研究や実験を進める上で、サポート役として加わったネリドラの存在が日に日に大きくなってきている。
三歩下がって後ろをついてくる彼女の服装は、僕特製の研究用スーツを兼ねたマジックアイテム。
僕の世界におけるナース服をファンタジー調にアレンジし、清潔感と動きやすさを両立させたピンク主体のデザインとなっております。
通気性抜群、滑らかな手触りに加え、耐熱、耐寒冷、防刃、全方位オートバリア、全属性魔法抵抗、パワーアシストに疲労回復補助機能まで付いている。ぶっちゃけ、防御力その他の性能が、ほとんどエルクとかシェリーといった戦闘要員と変わらないレベルである。
彼女は一応、身分的には僕が身請けした『奴隷』なので、首には奴隷の首輪を付ける決まりなん

だけど、そこは僕がちょっとごねた。あんな物々しいものを付けたままにするな、と。
その結果、ネスティア王国に何とか許可を貰って僕が自作した『首輪』を付けてもらっている。
首輪といっても帯の幅は一センチくらいで、チョーカーのようにしか見えない。だがもちろん、必要な機能をきちんと備えている。居場所を把握する術式も、主に危害を加えられないようにする術式も、それと一応、従わない場合に痛みの罰を与える術式も（使うつもりは全くないが）。
さらにさらに、魔法耐性とかオートバリア（服と合わせて二重）とか通信機能とか収納機能とか諸々付いてるので、最早超便利アクセサリーと化してしまっているのだ。
しかも！　彼女は僕の助手であるからして、調査・研究に使う様々な道具やマジックアイテム、薬品や資料なども常に携帯させている。首輪の収納機能で。
ついでに言えば、彼女は僕と師匠同様、『ラボ』に立ち入ることを許可された人間でもある。『邪香猫』に加入してからすぐに頭角を現し、程なくして師匠にも認められるほどの才能を見せ付けた彼女は、たちまち三人目のラボ立ち入り許可者となったわけだ。
もともと勉強や研究が好きだったらしく、やりがいを感じるのか本人も満足げだ。
というわけで、新戦力というか即戦力が助手として加わってくれたことで、僕の研究ライフはすこぶる順調なわけだが……あくまで僕の本業は冒険者である。
Ｓランクという立場上、やることはきちっとやらないといけない。最近じゃ、名指しの依頼とかもちょくちょく舞い込んでくるようになったし。

実は今日もこれから、その依頼を受けに行くところなんだよね。
そろそろ朝ごはんの時間だ。それ食べたら、依頼人――ノエル姉さんに会いに行かないと。

☆☆☆

で、その数時間後。
僕らは『オルトヘイム号』で、空を飛んでいた。
甲板には、今回のクライアントであり、僕の姉であるノエル姉さんが立っている。いつもと同じ、和服のような洋服のような衣装を、結構強めの風にはためかせている。
「おおきにな、ミナト、依頼受けてもろて。助かったわ」
「いやいや、何も気にするこっちゃないよ。姉弟なんだし……何ならタダでもよかったのに」
「そういうわけには行かへんやろ。お仲間も巻き込むことになるし……そもそもうちかて、商売で行くんやから。そのために浮遊戦艦まで動かしてもろて、タダはありえへんて」
そうかな？　僕にしてみれば、大したことじゃないんだけど。
「それにローザンパークは、徒歩や陸路で行くんは骨やからな、空飛べると楽でええわ～」
と、楽しそうに言いながら、姉さんは景色を眺めていた。
こうしていると、空の旅に無邪気にはしゃぐ、見た目相応の十四歳くらいの女の子にしか見えな

いな……実際は百四十歳だが。
「ミナト、今何やイラっとしたんやけど、いらんこと考えてへんかったか？」
「いや、何も？　それよか……陸路で行くのが大変なら、今まではどうしてたの？」
カンの鋭さにちょっとだけ戦慄しつつも、華麗に話題をそらして聞いてみる。
「ああ、うちが一人で行っとったで。誰かつけてくよりはそっちの方が動きやすいさかいな。品物を見て契約するだけやったら、一通り出来るし……行商の経験もあるしな」
「おーすごい、ノエル姉さん、商人みたい」
「いや、本職の商人やっちゅうねん」
元Sランク冒険者、現武闘派商人の姉に感心しつつ、今回の目的地に思いを馳せる。
ローザンパークは、このアルマンド大陸の中心部にありながら、どこの国にも属さず独自の統治機構やら何やらを形成して生活している……山賊達の集落だそうだ。
そういう場所は別に珍しくない。未開の地域なんかには、他と関わらず生活する先住民やら何やらが結構いるらしい。各地に隠れ里を構える亜人――エルフやドワーフその他を含めて。
しかし、中でもローザンパークは規模、面積共に桁違いの大きさなのだそうだ。
何せ、聴いた話から推測するに……面積が日本の本州くらいあるらしいのだ。大陸の全体図ではっきりと形が分かるし、六大国を除いたその他諸々の小国よりも圧倒的に広い。
もっとも、その全域が集落や居住区になっているわけではない。むしろほとんどは、危険区域よろしく魔物やら何やらが跋扈する未開の地である。
この地域が丸ごと国家の支配区域から抜けているのは、単に昔から超危険なエリアであったために、隣接するどこの国も開発を進められなかったからなのだ。
そんな超危険区域に住み着き始めたのが、とある山賊の一団だった。
もちろんただの山賊などではない。当時向かうところ敵なしの強さを誇っていた、時に国の正規軍と争って打ち破ることすらあった、とんでもない集団だったという。
多くの国が、地域が、集落が、彼らの存在を恐れたそうだ。
そのため、彼らがローザンパークを拠点として住み始めたのを機に、徐々に人が集まりだした。
ほとんどは、色々な事情で行き場をなくしたアウトローな感じの人々らしい。その手の人達がだんだんと集まっていき、ついには大国の大都市と並ぶレベルにまで発展を遂げたんだそうだ。
その過程では、当然この無法者達の集落の成長を危ぶむ声も各所で上がった。だけど、そもそも強すぎて手を出せなかった連中がさらに勢力を拡大させた上、超が付くほど危険な自然の要塞だったため、手の施しようもなかった。
しかも、彼らが集落を作ってるところが、山や川や谷などの地形の関係で凄まじく攻めづらい環境で、ますます手が出せない。
結果、他国の干渉を受けずに成長を続け、今に至るそうだ。
天然の要塞に陣取った山賊の集団、か……。なんか、昔の中国の物語にそんな場所があったよう

な気がするな……。歴史とか詳しくないから分からんけど。
ともかく、そうした歴史を経て形成された山賊集落ローザンパークが、今回のノエル姉さんの商売の相手。そこでしか手に入らない特産品とか色々あるとのことで……定期的に訪れては商談をまとめているんだそうだ。
え、山賊の集落なんかに行って大丈夫なのかって？
大丈夫らしいよ？　ノエル姉さん曰く……山賊って言っても、略奪メインの無法者じゃなく、普通に話が分かる人達らしいから。きちんと礼儀さえわきまえれば、気のいい人達だって。
……それにもう一つ、ノエル姉さんがそこを贔屓にしている理由がある。
なんと、そこの頭領が……ノエル姉さんの弟。すなわち、僕の兄なのである。
そういえば、こないだセレナ姉さんが言ってたっけな。職業山賊の兄がいるって。
名前は……イオ・プロセドン。
ノエル姉さん、ミシェル兄さんと並ぶ、キャドリーユ家三大問題児の一人。
……今はなぜか僕が加わり、『四大問題児』になってるみたいだけど。
いい機会だから、僕の面通しも兼ねるつもりらしい。どんな人だろうな。
なんて考えていると、まばらに木がある森林地帯だからちょっと分かりにくいが……視界の端に、四足歩行の鶏みたいな魔物が走っているのが見えた。
『ロースター』か、この辺りじゃ珍しいな。……最近食べてないな、そういえば。

僕はおもむろにスマホを取り出し、電話をかける。
『はーい、こちら操舵室。どしたのミナト？』
「お疲れ様、クロエ。ちょっと頼みがあるんだけど」
聞こえてきたのは、この船の操舵室――という名のコントロールルームで、操縦士兼オペレーターをしているクロエの声だった。
ネリドラと一緒にラグナドラスを出たクロエは、家事その他手伝い以外に何か出来ることはないか……ってことで、この仕事をやってもらっている。
ちょっと教えただけですぐに使い方を理解してくれたので、今ではすっかりこの船の搭載システム・武装等全般の管理を任せている。平時は操縦士として、戦闘時はそれに加えて、各種武装で僕らを援護しつつ、戦域全体をモニタリングしながら必要な情報を僕らに伝えるオペレーターとして。
本人も、普通じゃ絶対出来ない経験だって楽しんでやってくれてる。
ただ、ボタン一つでAランクの魔物を消し飛ばすミサイルとかが簡単に飛んでいったりするのがちょっと怖くなるそうだけど。いけないものを扱っているような気になるからって。
うん、まあ……開発者としては、分からなくもないけどちょっと複雑です。
さて、そんなクロエに今、なぜ電話をしたかというと。
「ちょっと美味しそうな食材が走ってるんで、獲ってくる。バリア開けて」
『あー、なるほど、了解。レーダーでも確認した。ロースターのことだね』

この船は、魔物の襲撃なんかを防ぐため、見えないバリアを常時張っている。何もないように見えても、その強度は大型の魔物の突進すら余裕で防ぐレベルなので――。

バン！

……今まさに起こったように、時々鳥や飛行型の魔物が激突し、墜落していく。

だから船の外に用がある場合は、クロエに言ってバリアを一部解除してもらう必要があるわけだ。

僕の視力でもよく見ないと分からないけど、さっそくクロエの操作でバリアに人一人が通れるくらいの穴が開いた。そこを通って船から飛び降り、今夜のおかずを確保しに走った。というか、飛んだ。

着地と同時に地面を蹴り……一直線に進む。そのまま、「えっ、何？」って感じになっているロースターの首元に蹴りを入れ、一撃で仕留める。首の骨が砕けた以外、何の損傷もないきれいな状態で、その場に倒れた。

しかしその時だった。

――クアァアアァア――ッ!!

突如、そんな声が響いたかと思うと、僕が立っている場所を巨大な影が覆う。

上を見れば、そこには……緑色の羽毛が特徴的な巨鳥『シムルグ』がいた。

本物を見たのは初めてだけど、以前師匠のところで、『スライムタイル』の擬態で再現された奴なら見たことがある。それよりもサイズ大きいけど……体の特徴は同じだからすぐ分かった。

鯨すら捕食する、っていう逸話があるのも頷けるサイズだな……両の翼を思いっきり広げたら、二十メートル以上になりそうだ。AAランクは伊達じゃないってわけね。

そのシムルグは、一直線にこっちに……いや、多分正確には、僕が仕留めたロースターめがけて突っ込んでくる。

そして、シムルグの狙いを察した瞬間、僕は臨戦態勢に入る。

やらんぞ。コレは僕の晩飯だ。返り討ちにしてもう一品付け加えてくれるわ。

あっという間に距離を詰めて飛びかかってくるシムルグ。

僕はその前に地面を蹴り、シムルグの首と同じ高さまで、十数メートル飛び上がる。

シムルグの視線がこっちに向くより先に、延髄斬りを叩き込んだ。

バキボキベキィッ!! と壊滅的な音がして、伝わってきた手応え（足だけど）から仕留めたと確信したその時……背後の森から、猛スピードで飛んで来る影が見えた。

……ありゃ、もう一匹いたのか。

番だろうか、今仕留めたのよりさらに一回り大きなシムルグだ。

このままじゃ、僕が自然落下で地面に辿り着くより早く空中で攻撃を食らいそうなので……『スカイラン』で回避しつつ迎撃しようかと足に魔力を集めた……瞬間。

僕とシムルグの間に広がっていた森から、突如……巨大な影が飛び上がった。

「ぬぅぅうん!!」

「……っっ!?」

何の前触れもなく、森から突如現れたその何かは……人の形をしていた。な、何だ!?

咆哮と共に、シムルグをバレーのスパイクみたいにひっぱたいて叩き落とす。

凄まじい勢いで地面に激突したシムルグは、確かめるまでもなく死んでいる。ありゃ全身の骨が砕けてるだろうし、翼とか足があらぬ方向を向いてて……ちょっとグロい。

それをやってのけた人型の何かはというと……器用にも空中で体をひねって方向転換すると、真っ直ぐこっちに向き直り……僕よりひと足先に着地。

そして、ワンテンポ遅れて落ちてきた僕を手でキャッチした。

そいつは……身長数メートルは優にあろうかという巨大な体躯をしていた。

僕のこと、フィギュアか何かみたいに片手で持ち上げてるし……目の前に顔があるんだけど、迫力がすごい。僕の身長よりちょっと小さいくらいの顔面サイズで……顔つきも怖い。

体は筋骨隆々で、ボディビルダー顔負けの力強い筋肉に全身が覆われている。

けど、多分……魔物とかじゃない、と思う。

さっきの咆哮、ちゃんと人間の言語っぽかったし、今こうして僕のことを見る両目には、確かな知性の光が宿っている……ような気がする。

「こんな所に集落の者以外で人がいるのは珍しいな。お主、外から来たのか？」

あ、やっぱりちゃんと人語もしゃべってる。魔物じゃなさそうだ。

「あー、はい、一応……ちょっとこの先の集落に用事があって」

「だろうな。この森にそれ以外の目的で足を踏み入れる者などいるまいて。見たところ腕が立つようだが……お主何者だ？　大国の間諜か何か？　それにしては堂々と入って来たようだが」

僕を地面にそっと降ろしながら、大男……いや、巨人と言っていいサイズのそいつは、ズシンと腹に響く声で、そう尋ねてくる。

上空に見えるオルトヘイム号に、ちらっと目をやりながら。

するとその時……何かを見つけたように、その巨人の目が驚きに見開かれた。

直後、僕の頭のすぐ横、巨人の指の上に、しゅたっと誰かが降り立つ……って。

「あ、ノエル姉さん」

「えらいけったいなとこで会うたな？　イオ、お前、こないなとこで何しとったん？」

「おぉ、久しぶりだな姉上！　何だ、あの不審な船は姉上のものだったか！」

僕と同様、数十メートルの距離をひとっ飛びで跳躍してきたはずなのに、さすがの戦闘技術というのか、僕よりも静かに、鮮やかに着地したノエル姉さんは、呆れたような視線を巨人に向けていた。

「いや、うちのやあらへんけど……ああ、あんたアレ見て様子見に出て来とったんか。……集落の長が自ら物見ってまあ、随分と思い切ったことしよるな」

「身一つで危険区域を突っ切ってローザンパークに商談に来る姉上が言えたことではなかろう。そ

れよりも、姉上が来たということは……それに先ほどの言葉、こ奴もしや……」
と言って、今度はこっちに視線を向ける巨人。っていうか、僕も気になったんだけど、さっきノエル姉さんのこと『姉上』って。それにノエル姉さんが口走った、この人の名前……。
とりあえず、挨拶。
「あ、申し遅れました。僕、ミナト・キャドリーユっていいます」
すると、またしても驚き、さっきよりも目を見開く巨人さん。
そのまま数秒ほどじろじろと僕のことを見ていたかと思うと、今度はニヤリと歯をむき出しにした。ちょっと、いやかなり凶悪な感じの笑顔が怖い。
するといきなり子供を『たかいたかい』するように……両手で僕を抱え上げた!?
「ぐはははははっ!!　そうか、お前が話に聞いていた新しい弟か！　なるほど、確かに言われてみれば、どことなく母上の面影があるな！」
驚く僕と、落とされないように慌ててバランスを取るノエル姉さんに構わず、巨人は大口を開けて豪快に笑いながらそんなことを……あ、やっぱりこの人が……。
「あの……もしかしてというか、やっぱりというか……あなたが？」
「おう！　はじめまして、だな、新しき弟よ。ワシがローザンパーク四代目頭領……イオだ」
僕を地面に下ろすと、凶悪な笑みのまま、彼――イオ兄さんは、そう名乗った。

第二話　ローザンパーク

独立自治区ローザンパーク。
賊徒、ならず者、はぐれ者達が流れ流れて行き着いた結果として形成された、国家非所属の超巨大な集落。独自の秩序が作られており、国に比べれば整っているとは言いがたいものの……きちんと一つのコミュニティとして機能している。
そしてそれを取り仕切っているのが、一般に義賊として知られる山賊集団『ガイア』であり、その頭領こそが、巨人族の末裔にしてキャドリーユ家五男……イオ・プロセドン。
「……と、いうわけだ。分かったか弟よ」
「とてもよく分かりました。しっかし、うちの兄弟はバリエーション豊かだねー、ハイエルフやエクシアにケモ耳、ドワーフにピクシーに邪眼、果ては巨人までいたとは。毎度びっくりだ」
「ぐははははっ、ワシとしては貴様も大概だと思うがな！」
ばんばん、とイオ兄さんは、オルトヘイム号の甲板を叩きながらそんなことを言う。
あの、ちょっと、あんまり強く叩かないで、強度かなりあるし大丈夫だとは思うけど、壊れたり揺れたりしそうで心配。

「浮遊戦艦！　話には聞いていたが、実際に見ると年甲斐もなく心躍るものがあるな」
この船の甲板はかなり広いんだけども……さすがに巨人サイズのイオ兄さんが座ると、少し狭く感じてしまうくらいの圧迫感がある。
「それに、ワシのことを事前にノエル姉上から聞いておらんかったことにも驚いたわ。自分で言うのも何だが、この通りの見た目だからな、ワシは。言われておらねば驚くだろう」
「あー、うん。見れば分かるって」
「まるで意地悪でもしておるかのようだな……何かそういうことをされるような心当たりはあるか？」
「……最近は心当たりしかないかも」
「は？　……ぐははははっ！　よく分からんが、どうやら楽しい弟のようで何よりだ」
とまあ、こんな感じで豪快な人物だ。このへんは聞いていた通り。
ちなみに、そのノエル姉さんは今、船内にいる。商売の準備が色々とあるそうだ。
そして僕は、甲板で胡坐（あぐら）をかいて風を感じているイオ兄さんの肩に座っていた。
肩車ってレベルじゃないなコレ……小人にでもなった気分だ。何か不思議。
「おっと。話している間に、どうやら見えてきたようだな」
言いながら前方を指差すイオ兄さん。前を見ると、ちょうど尾根を越えるところに差し掛かり、その向こうの開けた景色が見えてきて……。

「……おぉ……」
思わず口からそんな声が漏れてしまった。
前方に見える山の中腹辺りの斜面に、棚田みたいな感じで、その集落はだら～っと広がっていた。左右にも上下にも広く、だら～～っと。
階段状になった地面に、結構キレイというか、しっかりした作りの大小の家々が立ち並んでいるのが見える。さらに奥の方にはなんと……城!?
そしてそれら全体を囲む形で、高さ十メートルは優にあるだろう塀が建っていた。
パッと見は土壁のようだけど、それにしちゃ何だか雰囲気が重厚のような……。
さらに塀の前には堀まであって……マジでここ城塞都市だな。
それら全てが合わさり、何ていうか整然とした感じで……立地条件の特殊さに目をつぶりさえすれば、それなりの規模の都市と何ら遜色（そんしょく）ない感じだ。あくまで見た目は、だけど。
もっとこう、なんていうか……田舎風の村とか、簡素な住宅が立ち並ぶキャンプとか、仮設集落みたいなところを想像していたので、ちょっと意外だった。
いや、そんなこと考えるなんて失礼かもしんないけどもね？
そして、城が見えてから数分ほどで、正面玄関というか門に到着。
当然ながら、空飛ぶ船なんかが近づいて来たために、見張りの兵隊さん達は皆びっくりした様子でこちらを見ている。でも、甲板に仁王立ちするイオ兄さんを見つけると、少し安堵しているよう

だった。
まあ、イオ兄さんさえ見えれば警戒されないだろうって、狙ってやったんだけど。ノエル姉さんの案で。
門前に到着するやいなや、船の着地も待たずにイオ兄さんは跳躍し、特大の地響きと共に降り立つ。その地面の揺れに見張りの皆さんは転びそうになっていた。
イオ兄さんはオルトヘイム号が着地するまでの間に、周囲にあれこれと事情を説明してくれた。いい獲物が手に入ったとか、後ろの船は心配ないとか、あのちっこいのは新しい弟だ、とか。
……あんたに比べりゃ大抵の人はちっこいっちゅーの。
そして、船から下りてきた僕と僕の仲間達を前に、部下の人達に命令して観音開きの門をギイィィ……と開かせると、どこか得意げにこう言うのだった。
「歓迎するぞ、弟達よ。ようこそ、無法者（アウトロー）の楽園……ローザンパークへ！」

「ほぇ～……」
「ミナト、口開いてる」
呆れ交じりのエルクに注意を受けながら、僕は今……ローザンパークの大通りを歩いている。イオ兄さん達の一行と一緒に。

イオ兄さんの案内で、僕らは屋敷にお邪魔させてもらうことになった。
ここからでも見える、山の集落の一番高い所にあるお城……あそこが自宅らしい。
まあ予想はしてたけど。やっぱ指導者の家って、高い所に作られるのが慣例なんだろうか？
そこまでは一本道なので、はぐれないようについていくだけでＯＫ……なんだけど……。
この町（？）、僕の好奇心を大いに刺激してくれるものが多すぎる……。
なんていうか、その……活気がさあ、すごいんだ。
雰囲気的には……うーん、何かいいたとえ……あ、そうだ、縁日！
夏祭りとか、花火大会とか、高校の文化祭とか……ああいう感じのお祭り的な賑やかさと活気が、この町には満ち溢れているのだ。通りにいる人達も、皆笑顔で楽しそうだし。
それに、都会の店ほど整ってない、簡素な造りの店が立ち並んでいるのもまた雰囲気がある。掘っ立て小屋みたいな店舗とか、屋台とかもあるし。下手な高級店が並んでいるよりも……親しみやすさ？　安心感？　みたいなのを感じた。
そして、お店もバリエーションに富んでいる。食糧品店、薬屋、武器屋、挙句の果てには骨董（こっとう）市のようなものや、何かちょっと怪しいアンティークショップみたいなものまで……かゆい所に手が届きそうなラインナップである。
それに加えて、何より僕がこの町を魅力的に感じまくっている理由っていうのが……。
そこらじゅうから……そこらじゅうから、美味しそうな匂いが……。

この町……とくに飲食系の店が多い。
大衆食堂的なレストランに、世のお父さんが好きそうな飲み屋、さらには屋台や露店でも美味しそうな食材やら料理やらがあちこちで……ぶっちゃけ、超気になる。
匂いだけでも美味しそうだと分かる料理が、あちこちに……っっ!!
「……？　ミナト、どしたの？　何か見つけた？」
エルクの声に意識を向ける余裕がないくらいの衝撃……。
目の前に広がる光景に、僕は釘付けになっていた。
そこにあるのは一見普通の屋台……だが、問題は売られている料理だ。
あ、あれって……まさか……！
こ、米……っ!?
一粒一粒が少し歪んだ楕円形、って感じの……独特な形状。
空腹時には宝石すら霞んで見えるであろう、白い輝きを放つそれは……紛れもなく、米。
転生してからついぞ見かけることのなかった、日本人のソウルフードが目の前に……っ!!
「……おーい、ミナト？　どうしたの？」
「……はっ！　ご、ごめんエルク、ちょっと、その……見とれてた」
気付けば僕は硬直し、口の中では唾液が大洪水になっていた。あと二秒遅かったら溢れていたであろうそれを、慌てて飲み込む。

「む？　何だミナト、米が気になるのか？」
エルクの声に振り向いたイオ兄さんの口からそんな言葉が。やっぱりアレ、米か！
「米、っていうんですか……ミナト、そうなの？　てか、知ってるの？」
「え？　い、いや、知ってるとかじゃないけど……なんていうか、その……僕の直感というか、食い道楽センサーが、アレ絶対美味しいってさっきからガンガン反応してて……」
「何じゃそら」
エルク、ジト目になる。ほっ、ごまかせたみたいだ。
前世が日本人だから米に目を奪われてました、なんて言えないからね。
……それに、食べたくて仕方ないのは本当だし。あ、また唾液が……。
「まあ、知らないのも無理はあるまい。気候の問題で、よそではなかなか作れない作物だからな」
「あ、そうなんですか。どうりで見たことないと思った」
「加えて、好き嫌いが分かれる食べ物でな、需要もさほど多くない。アレを作っておるのはここ以外では東の方の国しかなく、輸送しようと思えばコストがバカにならん」
「イコール、輸入なんかもされないと……そりゃ見たことなくて当然ね」
なるほど……ネスティアやジャスニアでどんだけいい宿に泊まっても、どれだけ高級なレストランに入っても、メニューにないのは納得だ。今まで見なかったのも無理ない。
しかし、こうして知ってしまった以上は僕の食欲に火がついた……後で絶対食べよう。

いや、せっかくだ。どうせなら食べ歩き三昧といこうじゃないか。美味しそうな料理があちこちにあるんだし、こりゃ楽しみで仕方ないぞ。
「そんなに食べたければ、この後の宴で出してやろうか？」
どうやら顔に出ていたらしい。
エルクは呆れ、イオ兄さんはおかしそうに笑っていた。
「宴？」
「せっかく来たのだ、飯くらい食っていけ。いい獲物も手に入ったことだしな」
と、後ろを歩く部下に運ばせているシムルグを指差してイオ兄さんは言う。
血抜きも全部済ませ、あとはもう捌くだけ、って感じになっている。
「ワシに何か話とやらもあるようだしな。だが、謁見などという堅っ苦しいものは好かん。せっかくだ、食いながら聞かせてもらうとする」

「と、いうわけでいただきまーす！」
「何が、『というわけで』よ」
期待を裏切らない……どころか、軽く予想を上回るラインナップが目の前に広がっている。
大通りを真っ直ぐ進んで行き着いたイオ兄さんの屋敷……の、食堂。
なんていうか、宴会場みたいな感じの食堂だ。さすがに畳敷きの和室じゃなく、テーブルと椅子

の並ぶ洋室だったけど……すんごく大きなテーブルに、所狭しと料理が並んでいた。
急な来訪にもかかわらず、こんな豪華な歓迎の場を設けてくれるとは言葉もない。
そして、並んでいるのは、高級レストランとかで出てくるお上品な料理ではなく、大衆食堂っぽくがっつりいけるような、それでいてものすごく美味しそうなものばかり。
しかも、種類がまたすごいのだ。
ネスティアやジャスニアで見た洋風の料理ももちろんある。
フライドチキンにウインナー、ホワイトシチューにスクランブルエッグ……さらには分厚いステーキ、肉汁の滴るハンバーグ、こんがり焼けたトースト、瑞々しい葉物の野菜サラダ。
……あのフライドチキン、やけに大きいけど、もしかしたら今朝のシムルグだろうか？
軽めのものからガッツリ系まで、とにかくあらゆるものが並んでいる。
もちろん、洋食も美味しそうなんだけど……。
さらに驚いたのは、まさかまさかの中華料理である。
餃子に酢豚、カニ玉に八宝菜、シュウマイに小龍包、麻婆豆腐に麻婆春雨に麻婆茄子、回肉鍋にチンジャオロース……ん!?　あれってもしかしてフカヒレ!?　姿煮!?
あっちには北京ダックみたいなのもあるし！　この世界、北京ないから名前は違うと思うけど！
僕好みの味付け濃いめの料理の数々に、すでに唾液腺は決壊なう。ここは天国か!?
そしてそれらの料理をバックに、僕の目の前には……トドメとばかりに白いご飯が。

丼に超大盛。おそらく二合分くらいある。でも多分足りない。
「遠慮せずに食えよ？　飯や汁物はおかわりもあるぞ。それと、壁際に給仕達を控えさせてある。見たことのない料理も多いだろうから、説明が聞きたければ呼ぶといい」
さらにイオ兄さんは、正直気合入れて作らせすぎたから食べきれなければ無理するな、と。
……何をバカなことを、って感じである。
残すわけないじゃないか、こんなご馳走。意地でも食べ尽くすわ。
そう心に決めた僕は、食事開始の挨拶と同時に、目の前のご馳走に箸を伸ばした。
……うあ、やばい、久々の中華料理……マジ美味い。
餃子。パリッとこんがり香ばしく焼けた皮を突き破ると、中からたっぷりの肉汁が溢れ出て、そこにニンニクの風味、ひき肉と野菜の甘みが合わさって、噛むごとにそれら旨みの奔流が（略）。
麻婆豆腐。口に含んだ途端にピリッとくる辛さ、それと同時にぶわっと広がる肉と野菜その他の旨み、さらにそこにホロホロと崩れる豆腐（略）。
チンジャオロース。素材の新鮮さを物語るようなジャクッ、ジャクッとした歯ごたえ。同時に広がるピーマンの苦味はしかし全く嫌な感じはせず、むしろ一緒に咀嚼することで肉から溢れる肉汁の甘さといい具合に（略）。
途中、すごく微笑ましいものを見るようなノエル姉さんとイオ兄さんの視線にふと気付いたが、気にならなかった。ついでに、隣の嫁の呆れるような視線もスルー。

あーもう、最高！　ご飯おかわり！

「あー、美味しかった」

「食いすぎよあんた……確実に自分の体積よりいっぱい食べてたじゃない」

「なのに体重が増えることも体型が変わることもないっておかしいですよね」

食後。ジト目のエルクとナナの視線を受けながら、割り当てられた客間でくつろぐ僕。

あー、色々『否常識』な手段で消化吸収しとるからね、質量保存の法則も無視して。

しかしホント美味かった。滞在中に、シェーンに中華料理を覚えてもらおうかな。後で頼もう。

ここに来た目的……ノエル姉さんの商談が終わるまでは、姉さん共々しばらく滞在することになったからね。イオ兄さんのご厚意で。

というか、ノエル姉さんに護衛とか必要ないし。実質ただの足として来ただけだし……ぶっちゃけ、観光旅行に来たと思って好きなようにしていていいそうだ。買い物でも何でも。

ならこの後、あるいは明日以降、時間見てショッピング、なんてのもいいかもな。

貨幣についても、外の国で流通しているものが普通に使えるそうだ。

そんなことを思いながら、窓の外に広がる高台からの絶景を眺める。眼下には、来る時にも見た活気溢れる街並みが見えた。

「しっかし、すごいねここ。雑貨や薬品、武器防具はもちろん、屋台に食堂に、見たこともない美味しい料理があちこちに……何でこんなに充実してるんだろ？」

言っちゃ悪いけど、辺境って言ってもよさそうな場所なのに、大国の大都市と同じかそれ以上に活気があるってすごいと思う。

それだけじゃなく、色んな文化が混在しつつも上手く共存してるというか……もっと雑な言い方をすると、一緒くたになりつついいとこどりで残ってるというか。

独り言に近い僕の疑問に答えたのは、困った時に頼りになるチームの情報担当だった。

「僕もあくまで聞いた話だけど、ここは元々はぐれ者が集まって出来た集落なんだけど……それこそ、大陸中から人が集まって来たらしくてね」

毎度のことながら、いつどこから話を仕入れてくるのかは分からないが、今回もザリーの説明は分かりやすかった。

その昔、方々から流れ着いたはぐれ者達は、まだ出来て間もない集落で新しい人生を始めたわけだけど、それぞれのふるさとの文化――料理や建築様式、民族衣装なんかを皆が大事にし続けた。

そして、それに対して他の文化圏の人間は干渉しなかったらしい。

その結果、ローザンパークの文化は今の多種多様な形になったそうだ。

普通、別の国や地域に移住するとなると、そこに根付いた生活様式に合わせてライフスタイルを構築するものだ。

例えば、外国で暮らしてる日本人のお宅を訪問、みたいなテレビ番組で放送される『外国に住む

日本人』は、きちんと現地の文化に沿った暮らしをしていることがほとんどだったと思う。
それも当然だろう。住む場所が違えば、ライフスタイルも変えざるをえない。
手に入るものは基本的に現地のものになる。食材も、洋服も、雑貨も……それこそ、家も。
中国に住めば食べるものは中華メインになるし、アメリカに住めばビッグサイズの洋食になるし、アマゾンに住めば……いやちょっと分からんけど、とにかく現地のものだろう。
それはこの世界でも同様なのだけど……ローザンパークに限ってはそうではなかった。
何せ寄せ集めの集落であり、合わせるべき現地のライフスタイルというものがそもそも存在していなかったのだ。もともとそこに暮らしている者がいないのだから当たり前といえば当たり前だ。
そのため、移民達は独自のライフスタイルを保って生活出来たのである。
そんなことが繰り返されて、いつの間にかこのローザンパークには、大陸各地の伝統文化が混在するようになったのだという。中には、移民前の場所ではすでに失われてしまった料理などもあるとかで……すごいな、まるで博物館みたいじゃないか。
「極端な話、ここにはアルマンド大陸中のあらゆる国から流民が居ついてるから、どこかしらで各国の名残を見ることが出来るわけ。だから、訪れた人は皆一様にこの町を見て、『何だか懐かしい』っていう感想を抱くと言われてるそうだよ。まあ、ごく最近出来た国……お隣の『リアロストピア』なんかはさすがに例外かもしれないけどね」
「へー……エルクもそう思う？」

「いや、あんまり……私の地元、ネスティアの端っこの、田舎の小さな村だったし」
そこまで特色がないっていうか、とエルク。あれ、そうなんだ。
「私も、生まれも育ちも隠れ里だったから、そうね。特に懐かしさはない……かな？」
「面白そうなところだとは思いますけどね。あ、私とシェーンちゃんもそうですね」
「ミュウは生まれが不詳、私は海の上、海賊船生まれだしな……各国の料理は興味深いが」
次いで、シェリー、ミュウ、シェーンもそんな感じだ。今さらだけど、特殊というかマイナーな出身地多いな、このチーム。何せ僕も樹海育ちだし。
……あ、でも、ネスティア出身が多いのか。
シェリーやミュウみたいなどこだか不明なのを除けば、ほとんどが……それこそ、ネリドラ（と、別人格のリュドネラ）以外全員そうじゃないか？
ああ、いや待て、ザリーも違ったんだっけ。ええと……確か……。
「フロギュリアだっけ、ザリーは？　ネリドラと同じで」
大陸北東部にある六大国の一つ『フロギュリア連邦』。いつだったか、そこ出身だと聞いた。
「そうだね。でも……あんまり懐かしい感じはしない、かな？　似たような料理はあったけど」
すると、ネリドラも頷く。
「私も同じ。料理も似てるのは見た目だけ……多分気候が違いすぎるから」
「気候？」

「フロギュリアってさ、滅茶苦茶寒いんだよ。だから、それに合わせて濃い味付けになってるんだけど……さっきの料理は、結構違う味付けになってたからさ。多分、ここで暮らしていくうちに、このへんの食材や気候に合わせていったのかもね」

そうネリドラの言葉を補足したのは、リュドネラだ。彼女はさきほど『アバター』としてネリドラから独立し、料理を堪能していた。

「なるほど、そういうもんなのか……ん？」

話の最中、僕はふと眼下の光景に気を取られた。

ここからでもよく見える（僕の視力だとなおさら）町の大通りを歩いている数人の男女。

正確には、その服装に。どうもその……周りと比べて浮いているというか。

ここローザンパークで暮らしている人達は、料理と同じように、服装も見事にそれぞれの郷土や民族の特色が表れていてバリエーション豊かである。

あっちに和装、こっちに洋服、そっちにチャイナ……と、ちょっとしたコスプレ会場みたいだ。

しかし、そんな多種多様な服装の人々にも共通点と呼べるものがある。

それは、行き過ぎた豪華な装飾はないということだ。

鮮やかな模様や飾り紐はあるんだけど、宝石やら貴金属を身につけた人はほぼいない。せいぜいアクセサリーに多少飾りが付いている程度だった。

しかし、あの一団は……場違いなほど華美というか煌びやか……ゴージャスな服や装飾品を身に

纏っていた。

男性も女性も余所行きの上質な礼服やドレス。指輪やブレスレット、ネックレスやブローチといったアクセサリーも、メッキではないと思われる金銀に煌めき、大粒の宝石類が付いている。

……何だろう、あの一団は？

「ああ、あれは多分……他国の使節の方々ですね」

いつの間にか隣にいたナナが、同じ一団を見下ろしながら呟く。

スナイパーだけあって視力はよく、また僕特性の視力強化の『否常識魔法』も使える彼女ならあのくらいの距離でも十分よく見えるはずだ。まあ、僕は素で見えるが。

反対側にはザリーもいて、同じように窓から外を見る。

「割とよくあるって聞いてたけど……なるほど、分かりやすい」

「んー……説明プリーズ」

聞けば、前にも話したけど、このローザンパークは大陸の中央部にあり、実に五つもの国と国境を接している。

大陸西部のネスティア王国、中央部のベイオリア王国と、リアロストピア共和国、北西部のフロギュリア連邦……そして、北部のチラノース帝国の五つ。内、ベイオリアを除く四つが六大国に含まれる。

残る二つ……南部に広がるジャスニア王国とシャラムスカ皇国には接してこそいないものの、大

陸の北半分に存在する国々にとって、ローザンパークはあらゆる意味で重要なポジションにある。
多くの国と国境を接しているということは、いわゆるハブ空港みたいに、ここを経由することで色んな国に行けるということだ。国同士の交流には欠かせない場所といえる。
奥地にこそ行けば危険だが、外周を大回りすれば、さほど危険な魔物も出てこないわけで。相応の精鋭を護衛に付ければ、行き来することは難しくない。
さらに……いざ国家間で戦争となった場合、戦略的に非常に重要なエリアにもなる。ここを通れるか通れないかで、取れる戦略が大きく変わるからだ。何せ攻め込む際にはショートカット出来るし、敵国が通れないとなればそれだけ進攻を遅らせられる。
そうした非常時に備え、周辺国は可能な限りローザンパークと友好な関係を築いておき、いざという時に協力してもらえるように……アレな言い方をすれば、ご機嫌を取っているわけなのだ。
そのため、どの国も定期的に使節団を派遣し、贈り物を置いていったり、会談や会食の場を設けたりしているそうだ。さっきの一団もその類ってことか。
ちなみに、もっと過激な……言ってしまえば、『征服して自分の国の領土にしてしまえ』っていう思想の国もあるそうだ。まあ、言うまでもなく……某北の国だが。
実際に、公的には『どの国の領土でもない』という扱いのローザンパークを、唯一『あそこは我が国の領土である』と主張して、さっさと軍門に降れ、税納めろ、言うこと聞けｅｔｃ．……といった妄言をここ何年、何十年と繰り返しているんだとか。

全くチラノース、領土問題まで起こしてんのかよ……資源目当ての開発や威力外交、さらに他国への工作員の派遣に加え……本気でめんどくさいな。
「……やなこと考えたら、甘いものが食べたくなった」
「まだ食べるんですか……」
若干呆れ気味のナナと、苦笑いのザリーが窓から離れたその時……僕は眼下に、もう一つ気になるものを見つけた。ちょうど今、建物の陰から出てきた一団だ。
多分だけど……同じように、他国の使節じゃないかと思う。
やはり装飾品が多めで煌びやかな……しかし、さっきの人達よりは少し落ち着いた礼装を身に纏っている男女が数人。
ほとんどは従者のようだけど、真ん中を歩く男女二人だけは、一見して貴人だと分かる。
そして僕は、その二人になぜか目を奪われていた。
男性の方は、背の高い茶髪のイケメンだ。年の頃は二十代後半ってとこかな？　顔の彫りが深いから、もうちょっと老けて見えなくもないか？　あと、結構目力ある。
高そうなスーツに近いデザインの上下に身を包み、腕や首元にはこれまた高級そうな、しかし派手すぎないデザインのアクセサリーがちらほら見える。
敏腕ビジネスマンにも見えるし、ホストっぽくもある……コメントしづらい。何となく、どこかで見たことがある気もするけど……。

で、女性の方は……まだ少女と言ってよさそうな年齢だ。僕と同い年か、少し下かも。
ウェーブがかっていて結構なボリュームがある明るい紫紺の長髪。
ドレスというにはやや大人しく、しかし礼服というには少々派手に見える服を着ていた。何ていうか……変身ヒロインとか、アイドルが着そうな感じ。
しかし、着ている本人の振る舞いも手伝ってきちんと気品はあった。
少し童顔だけど、釣り目気味で気の強そうな感じの子、だな……。
なんて考えていたが、しばらくすると糖分への渇望が勝ったので、部屋備え付けのお茶菓子に突撃していった。
……この時の僕は、当然のことながらまだ知る由もなかった。
その紫髪の少女と僕らが、今後大きく関わっていくことになるということを……。

☆☆☆

数十分後。
紫紺の美少女を中心とした一団は、玉座に腰掛けたイオの前に立っていた。
イオの出で立ちは、ミナトが去った後とは大きく変わっている。
山賊らしく荒々しくも、威厳と威圧感を醸し出す装束を纏い、玉座に座って客人を迎えていた。

仮にも無法者達の頭領。相手に舐められてはいけない場では、こうするのが常だった。ミナトに対しての態度は、その『舐められてはいけない相手』に当たらないがゆえだ。
ミナトがその装束を着たイオを見たら、きっと『ラスボス』という感想を抱くに違いない。
「ローザンパーク頭領、イオ・プロセドン殿。このたびは、かような謁見の席を設けていただきましたこと、我が国を代表して感謝いたします」
「うむ。長旅ご苦労であった、使者殿。楽にするがよい」
イオの物言いに少女は軽い会釈を返すのみであったが……少女の傍らにいた茶髪の男を筆頭に、周りの数人が眉をひそめていた。当然、その不快そうなリアクションにイオも気付いている。
理由は明白である。大集落の長とはいえ、無位無官の山賊が自分達にこのような口の利き方をするのが気に食わないのだろう。
「して、此度は何用でこのような辺鄙な所へ参られた？」
「はい。王命により、ローザンパークと我が国の変わらぬ友誼の確認と――」
イオはしばし使者の話に耳を傾ける。
もっとも、毎度聞かされるものと大して変わらない内容に、半ば以上は聞き流していた。
そのまま退屈に終わるかと思った矢先、イオはふと、あることに気付いた。
イオはそれについて、相手側が政治的な用件を全て話し終えたところで、世間話でもする調子で切り出してみた。

この世間話がきっかけとなり、本来交わるはずのなかった二つが、後に密接に絡んでいくことになる。もちろん、謁見の場にいる誰もが、そのようになるとは予期していなかった。

「……そのお話、詳しくお聞かせ願えますかしら？」

唯一、紫紺の美少女を除いては――。

第三話　紫紺の美少女

ローザンパークに来て一夜が明けた今日、ただ今僕は食べ歩きの最中である。有言実行。邪香猫メンバー皆で、ショッピングも兼ねた食い倒れツアーの真っ最中なわけだが……いや、ホント色々あって飽きないね。

食堂やレストランで食べるタイプから、食べ歩き出来るファストフードまで。色んな国と地域の物が揃っている。

Ｓランクの冒険者チームともなれば、自画自賛だけど相応に実入りは多い。暇つぶし感覚でクエストをさくっと消化する日々なので、お金は有り余っている。

その財力を武器に、皆思い思いに食べたいものを食べ、欲しいものを買って楽しんでいた。言うまでもなく僕は、食べ物に関してはもう片っ端からって感じだ。

立ち読みサンプル
はここまで

それでもなお、この町は一日二日じゃあ回り切れる気がしない。気に入った店をリピートしたりすることを考えれば、一週間は欲しい。

まあ、姉さんの案件もそのくらいかかるらしいから、なんとかなるだろう。

「そんだけの期間、ずっと食べ歩きを続けるつもりか、あんた……」

呆れ顔＆ジト目のエルク。いやまあ、言わんとすることは分かる。

いくら何でもひたすら食っちゃ寝してたんじゃ、不健康というかなんというか褒められた生活じゃないしね。

「それ以前に、確実に太るわよ……ぶっちゃけ、私もちょっとその、ここの食事は美味しくて、食べすぎてる気がするというか、抑えるのにちょいちょい失敗してるというか……」

「ですよね……食べた分動かないと、その……そろそろ……」

エルクとナナの言葉に、シェリー以外の女性陣が俯きつつ頷いた。

ああ、まあ……女性には、切実な問題ではある、よね。

ちなみに、例外的に『？』な表情を浮かべているシェリーは、世の女性が羨望する食べても太らない体質であるらしく、嫉妬の視線を一身に受けながら、僕同様好きなように食べまくっています。

しかし確かに、食べてばっかりってのもアレだな、体が鈍りそうだ。日々のトレーニング、その積み重ねによる成長は、おろそかにしていいものじゃない。

この辺りは、転生してからの生活で染み付いてるので、僕もサボるつもりはなかった。